

塾生による

リレー・エッセイ(9) スローライフのすすめ



今西 通好
(健塾2期生)

10年ほど前に訪れた大分県の大山町という山村は、清流のほとりにドイツ風のコテージが並び、地元のおばあさんたちが煮しめなど郷土料理に腕をふるうビュッフェレストランは週末など都会の観光客で列ができるという。

一番の売り物は近在の農家が作った野菜や果物などの農産物。新鮮さが魅力で全商品に誰が作り出荷したか表示があった。今でこそ珍しくないが、実はこの町が1970年代当時の平松守彦知事が、歓楽型温泉に背を向けて自然と融合した温泉地を目指していた湯

布院と共に着目して「一村一品」運動を提唱、それがその後の「村おこし」や「地産地消」という全国的な流れを作った元祖であることは今や広く知られている。

10年遅れて80年代イタリアでマクドナルドのローマ出店に対抗して「スローフード」運動が興ったが、それが掲げる食べ物の定義も、その土地の産物であることと土地の風習に合った調理法で作られていることが条件で、大分県の「地産地消」が目指したものと違わない。双方には何の繋がりもなく、たまたま食文化を誇る両国民が食のありようを追求してゆくと、同じことに辿り着いたというのが面白い。

日本には90年代になってこの食文化の理念がさらに膨らんで、ライフスタイル全体を見直すという「スローライフ」、それに学んだアメリカでは「LOHAS」(Life of Health and Sustainability)が提唱されている。いずれにも根底にあるのは大量生産、大量消費、大量破棄の経済の営みをこのままのスピードで続けていくと、地球ではなく人類が破滅してしまうという至極当然な洞察と一握りの叡智だろう。

先年亡くなったが、「スローライフ」の提唱者の一人でもあった筑紫哲也氏の随筆に「地球上に現れた生物のなかでも最も『凶暴』な存在である人類が滅亡した後、地球自体はその生命力を取り戻すであろうから『地球を救え!』は誤りで、自分たちとその子孫をどう救うかが私たちの課題なのである。」とあったのを、今も原発問題と重ねて思い起こすのである。

事務局から



アンケートのご協力、
ありがとうございました!

来年度から、8年目を迎える「連塾」が、さらに進化し、発展を遂げるために、会員の皆様方には、アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。いただきました貴重なご意見を生かしつつ、事務局体制・組織・活動の在り方について再構築し、また新たな一歩を踏み出したいと役員一同、決意を新たにしています!

熙連会主催

大掃除・餅つき・年越しそば大会

H23年12月30日(土)

年末の恒例行事となりました熙連会(連塾・健塾同窓会)主催の大掃除・餅つき・年越しそば大会が、暮れの12月30日に開かれました。

まず、コミュニティ・プラザの庭の草取りや室内の台所や床拭き、窓ガラス磨き等の後、餅つきを始めました。塾生の中でも最若手の川井さん、山室さん、船越さんが息の合った軽快な杵の音を響かせ、つきたてのお餅に餡こやきなこを付けて、美味しくいただきました。



続いて、田口さんのご協力により、いつもの美味しい手打ちの年越しそばを賞味しました。これで、連塾活動一年の爽やかな締め括りができました。



この後、池本さんのご指導により何人かの塾生がフェイスブックに登録することができました。また、新しいつながりが生まれそうです。



<熙連会事務局・高取さん撮影>

編集後記

あの日から1年...

3月11日午後2時46分...、全国で深い鎮魂の祈りが広がりました。大震災から丁度一年が経過し、依然として瓦礫が周辺に積み上げられ、波が全てをさらい見渡す限り無のままの「まち」もあれば、劇的に復旧を遂げ、仮設の店舗ながら、また新たな活気を蘇らせた「まち」もあります。被災地復興の様子は様々です。

被災された人々の胸の内に共通にある底知れぬ喪失感を鎮めることができるのは、人と人との「つながり」でしかないということに改めて実感した一年でした。

(連塾1期生・角田みどり、田口琢磨)

特定非営利活動法人(NPO法人)

連塾ニュース

第9号

平成24年3月25日発行

(所在地: 〒700-0015 岡山市北区京山1-2-21
☎086-251-4615)

編集担当
角田みどり・田口琢磨

「東日本大震災」後一年を迎えて思うこと

理事長 松畑 熙



「東日本大震災」後1年が過ぎた今、私たちは何を考え、どのような行動を起こしていくべきでしょうか。一人ひとりが個別に、そして連塾として協働して、何をなすべきでしょうか。東日本の復興には何十年もかかるわけですが、日本人全体の課題認識と支援活動のあり方の模索は今後もずっと私たち一人ひとりの問題として考え続けるべきです。

具体的には、まず、大震災を通して何を考え、何を学んだかを明確に意識することから始めなければなりません。あれは東日本で起こったことで、この岡山ではまず大丈夫だろう、というような考え方で良いでしょうか。東日本大震災は、未曾有であり、想定外の規模であって

気仙沼で被災された多くの方々、津波はまあ1メートル程度だろうと軽く考えていた人が多かったようですが、実際には最大25メートルもの津波のため逃げ遅れて亡くなられた方々がほとんどのようです。自然災害の脅威や防災意識をきちんと持つことが大切です。

次に、大震災を通して、命の大切さや生きるということの原点を考えるということです。最後まで防災センターのスピーカーを通じて速やかな避難を訴え続けて亡くなられた女性職員の「声」は私達に何を問いかけているのでしょうか。そのような人たちの遺志のバトンを受けて生きていかねばなりません。

また、「絆」「連」の大切さです。連塾が基本としている理念であり、命・人・自然・歴史との連をつないでいく役割を再認識したいものです。少なくとも20世紀頃までの日本人が最も大切としてきた、「思いやりの連」が大震災は思い起こさせてくれています。自分さえ良ければそれで良い、と言うような利己的な個人主義から、どのようにして脱皮していくかに叡知を集めていかねばなりません。

「フェイスブック」に登録しよう!



『ソーシャルネットワーク』という言葉が聞かれたことはあるでしょうか?今とても注目されているインターネットのサービスのひとつです。なかでも、近年一番勢いのあるのが【フェイスブック】です。最近テレビやラジオでも【フェイスブック】という言葉は耳にすることが多くなったと思いますが、実際にはどんなものか、まだまだ知らない人が多いのではないのでしょうか?

しかし、全世界の8億人が加入しているのです!日本ではすでに1000万人が利用しています。私は、いち早く登録し、この『コミュニケーションツール』の魅力にとり憑かれ、県内各所で勉強会を開催したり、希望者には個別レッスン、企業の導入サポートなどの活動を行ってきました。

フェイスブックの最大の特徴は、顔の見える間柄素早く、深くコミュニケーションを取る事ができるということです。『連塾』の目指す『人と人との連(つながり)』を補完して、仲間づくりコミュニティ作りのサポートをするには最適のツールなのです!!IT機器が苦手と言う方もいらっしゃるでしょうが、実際には操作も簡単で携帯からでもすぐに利用する事ができます。大切なのは【誰かと一緒に始める事】すでに松畑塾長はじめ、多くのメンバーが参加されています。連塾内でも講習をしていこうと考えています。

この機会に新しい世界に一步踏み出しませんか!!

(連塾7期生 池本行則)

「震災後の今、“連(つな)がり”の再生を！」をテーマに
「第3回 地域創生フォーラム」の開催



平成23年12月6日(日)・岡山県生涯学習センター



松畑理事長による開会挨拶

連塾が主催事業として開催する「地域創生フォーラム」も今年度3回目を迎えました。今回も会場は岡山県生涯学習センターで、「東日本大震災復興・復興支援」をメイン・テーマに実践発表とシンポジウムを行いました。3/11の大震災以来、連塾・健塾の会員が主体的・積極的に実践してきた支援活動を報告するとともに、県下の組織・団体として震災復興支援に取り組まれた各代表者4名の皆さん方から、それぞれの立場での活動内容を発表していただきました。松畑理事長をコーディネーターに意見を交わし合い、大変内容の濃いフォーラムとなりました。当日は約50名の参加者でしたが、「こんなに素晴らしい内容のフォーラムをもっと多くの人に聞いていただきたい。非常に残念。」という声が聞かれ、来年度に向けて「広報・告知」についての方法や「会員への周知徹底」の仕方の見直しという課題が残されました。

塾生による実践発表

(6名の塾生が、NPO法人連塾で取り組んだ支援活動を発表)

①「街頭での義援金募金活動」

◆3月20日と4月17日の2回連塾・健塾会員が岡山駅東口にて行った募金活動による義援金を関係先へ寄付
角田みどり
 (連塾1期生)



②「『和楽プロジェクト』への支援物質協力」

◆被災者への支援物資提供を連塾・健塾会員に呼びかけ、3日間で集まった物資を提供
横山 嘉和
 (健塾1期生)



③「『和楽プロジェクト』の取り組み」

◆川上町にある民宿「百姓屋敷わら」へ福島から被災者を入れたるの支援を実施
船越 耕太
 (連塾7期生)



④「森林木材を活用した被災者支援」

◆「百姓屋敷わら」にて、被災者親子の心をつなぐ「木材ジャングルジム」組立等を実施
安田 年一
 (連塾3期生)



⑤「『住居提供』による被災者支援」

◆福島いわき市より一時避難してきた親子3人に住居や寝具を提供して支援実行
平井 芳和
 (連塾4期生)



⑥「『茨城NPO法人イパ外』との交流と支援活動」

◆連塾と交流のあるインパクトが被災され、支援と現地訪問を実現
千房 新太郎
 (連塾2期生)



シンポジウム テーマ：「震災後の今、“連(つな)がり”の創生を！」

コーディネーター：松畑熙一理事長
 パネリスト：◆大塚 愛 氏 (子ども未来・愛ネットワーク代表)
 ◆石原 和宏 氏 (岡山市社会福祉協議会ボランティアセンター長)
 ◆山室 顕規 氏 (和楽プロジェクト・リーダー 連塾7期生)
 ◆佐藤 竜一 氏 (中国学園大学・東日本大震災学生災害ボランティア)



大塚氏 石原氏 山室氏 佐藤氏

自らが福島県川内村で被災され、第一原発事故の放射能の恐怖から、実家のある岡山へと避難された大塚さん、第二の故郷への愛着の思いを語られました。来岡後も積極的に反原発運動を続けておられます。岡山市社協ボランティアセンターの立ち上げに貢献された石原さんは何度も被災地を訪れて、その責務を果たされ、義援金の引き渡し等にも携わられました。「和楽プロジェクト」の山室さんは、代表の船越さんとともに、多くの被災家族を川上町「わら」に迎え入れて、皆さんから多大な感謝の気持ちを受けました。学生としてじっとしておられなかった大学生の佐藤さんは、大学からの学生ボランティアに一番に名乗り出られ、気仙沼での支援物資種分け作業に尽力されました。いずれの方々も、震災後の今だからこそ、改めて人と人の「連(つな)がり」の大切さを実感され、ネットワークをはることで、何倍もの力が発揮されることを強調されました。



司会者：杉村洋子 (連塾7期生)

「人づくり・地域づくりフォーラム in 山口」に参加して来ました！



山口県セミナーパーク 2月18日(土)～19日(日)



2月19日のフォーラムの様子

第7回を迎えた「人づくり・地域づくりフォーラム in 山口」に連塾から松畑理事長をはじめとし、安田・藤井清・千房・藤井裕・角田の計6人が参加し、2日間で全国からの参加者延べ2000人を超えるフォーラムの強烈な熱気にふれて来ました。連塾としての当フォーラムへの参加は、これで連続して4回目となります。今回は、連塾1期生で当時はまだ大学生であった藤井裕也さんが、海外体験を経て今年度より美作市の職員になっておられ、森林問題に取り組んでおられることから、「まちづくり」に興味を持たれて参加されました。今年もまた、6分科会ごと4つの実践発表で全国から24の実践事例が披露されました。今年のテーマは「公民館活動」でしたが、中には「四万十おかみさん会」のコミュニティ・ビジネスの発表もあり、興味深く関心を持って拝聴しました。



講演中の山崎大地氏

ある直子さんの夢を実現させるために職を辞してアメリカと日本の別居婚を続けられ、その間の長女の子育て苦労話や自分の夢の断念への葛藤、スペースシャトルが打ち上げられた時の感動など独特のユーモア精神と語り口で聴衆を魅了しました。山崎大地さんは自他共に認める「イクメン」(育児をする男性)の先駆者とも言え、男女共同参画の視点からも非常に面白い講演でした。帰途の車中では、「人づくり・まちづくり」の話題で花が咲き、四万十おかみさん会の視察や美作市職員の藤井裕さん宅を訪問する計画で、大変賑やかで盛り上がるひとときとなりました。

来年は、2月16日(土)・17日(日)です。皆さん、多数で参加しましょう！



「山口県セミナーパーク」前にて

県立児童公園・太陽の丘 「日曜大工の日」が、毎回大盛況です！



10月-桧製ジャングルジム組立

県立児童公園・太陽の丘では毎月第3日曜日は「日曜大工の日」です。昨年10月から私3期生の安田が中心となり開催する事になり、3月末まで半年間で6回開催しました。10月の第1回は2期生の千房さんによる「親子で歌おう」他、多彩な顔ぶれでの開催となりました。



11月-棒と輪ゴムでつくる家

毎月のイベントでは子供たちの創造力を生かしながら木に触れる体験と、市街地では体験出来ない「かまど」で薪を使った火を焚く体験も行っていきます。…結構はまります。

4月以降も継続的に開催しますので、連塾生の方でご自分の特技を生かし、この「日曜大工の日」にご協力いただける方、安田までご一報ください。(連塾3期生 安田 年一)



12月-親子でつくる家



1月-木製CDラックづくり